加藤慶子展 2017/06/07-17 steps gallery Criticism by MIYATA Tetsuya Vol.173

加藤慶子ステップス初個展である。加藤は既に幾つかのギャラリーのグループ展や二人展に参加してきたが、本格的な個展は今回がはじめてである。加藤は野外に咲く花を取材し、キャンバスにアクリルで起こしている。加藤の描く世界が単なる風景画ではなく、確固たる現代美術であると私は感じていたので、吉岡に加藤を紹介し、実現した。

ステップスギャラリーが、まさに草原となった。青々とした葉と幹に、赤、青、黄など、それぞれの花が力強く咲いている。会場を何度巡っても飽きないのは、総ての作品が異なる点にある。上列の図版は部分であるが、ここまで描き方を使い分けているとは、私も今回気がついた。緻密に描いている作品があるかと思うと、別の作品はさらりと抽象的にしている。また別の作品は、点描のように具象/抽象とは異なるタッチを施している。

それは技法の問題だけではなく、加藤が持つ画面に対する意識を変化させている点もあるのだろう。同じ視点で制作に向き合っていない。常に冒険と実験に満ち、新たな道を開拓しようとする、画家本来の本質に溢れているのだ。それは取材の時からそうなのであろう。

どこの風景の、何の花をモチーフとし、何の為に、誰の為に描くのかを、加藤は歩きながら自問し続けているに違いない。唯好きで描くなら、普通、ここまでしない。加藤は単に美しい風景を描きたいのではなく、かといって、風景と花に思想を寓話化して密かに盛り込んでいるわけではない。花と風景は、加藤が見た花と風景のままなのである。場所は海外の場合はあろうが、時間は決して古い取材記を使っているわけではあるまい。今なのである。「いま、ここ」にいる私＝加藤が描きこまれ、加藤が描いているのだ。道端の花という、決して可憐ではない、多くの人が見過ごしてしまう瞬時の状態を掴み取っている。切り取られた花がないように、我々もまた、疎外されてはいても、社会から逃れることは出来ない。そして、逞しく生きていこうとする者も多くいる。この状態を加藤は描いていると思う。我々が精一杯生きるのと同様、花もまた、自分自身の為に咲く。人間の為では決してない。この自然の営みに対して、加藤は敬意を払いながらも、容赦なく、自らの世界として形成していく。加藤の作品群を、もっと多く見たい。そのためには、個展の連続が不可欠なのである。

〒104-0061 東京都中央区銀座 4-4-13 琉映ビル 5F Tel&Fax 03-6628-6195 http://www.stepsgallery.org/